

花魁道中

志村 良知

悠遊31号に池松さんが書かれている花魁道中なるものに、東北旅行の際某地で出会った。失礼ながらどうせ田舎のお祭りの出し物だろうと高を括って見物人の並びの中に入った。アナウンスが出演は黒沢尻歌舞伎保存会、アマチュアながら海外公演の経験もある一座だと紹介する。

花魁道中とは名のある大夫が自分を指名した客を迎えに引手茶屋に向かうときの行列で、数ある廓のしきたりの中で、最も大がかりかつ馬鹿馬鹿しいもので、疑似嫁入り行列だという説もある。

今回出会ったのは大夫が二人、総勢20人の大デレゲーションだった。

先頭は大夫の所属の妓楼の名入りの高張提灯を掲げた男衆二人。

続いて金棒引き二人、五尺あまりで手元に金属の輪のついた金棒で地面を突いて、音で道中の到来を知らせる。時にこの棒で無頼の輩を追い払ったりもした。

大夫の身の回りの世話をする少女、禿が二人大夫の小物を持って続く。

大夫の名前を書いた箱提灯を持った提灯持ちに導かれてやっと大夫の登場となる。

巨大な鬚の高島田に煌びやかな簪、帯は前に大きく垂らしてその豪華さを見せびらかすまな板という結び方。素足で見物人に高い足駄の底を見せる外八文字という歩き方でやってくる。外八文字は四拍子二小節がセットで時速はせいぜい数百メートル、一人では歩けないので脇に肩貸しという役割の男衆がいて大夫を支える。後ろから笠差しが、大夫に笠を差しかける。

さらに禿二人、提灯持ちが続いてもう一人の大夫。続いて新造4人。若い遊女で着物も頭の造りも大夫より地味、江戸褌がひとり混じる。

最後は遣り手婆。禿、新造時代から廓で三千年の甲羅を経た凄腕の支配人である。

この一座が茶屋に繰り込んで酒席を設け、頃合いをみてまた逆コースで今度は客と一緒に大夫の妓楼に戻る。

今回見たものはYOUTUBEに上げられている各地の花魁道中に比べ、「元禄花見踊り」に合わせたの統制も見事で優美であり、黒沢尻歌舞伎畏るべしと思った。